

端境期である夏秋期に果実を生産可能な 四季成り性のイチゴ新品種「夏のしずく」

イチゴは生食用やケーキ等の業務用として周年需要がありますが、6月から11月にかけての夏秋期は生産量が落ち込み端境期となっています。国内の寒冷地・高冷地では、夏秋期に主に業務用として出荷する夏秋どり栽培が行われ、高単価販売による高収益経営が行われています。しかし、夏秋どり栽培で用いられている四季成り性品種の改良の歴史は浅く、収量性や日持ち性、輸送性などの改良が求められていました。そこで、農研機構東北農業研究センターは、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県との共同研究で、6～11月に収穫できるイチゴ新品種「夏のしずく」を育成しましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 多収性の四季成り性品種「みやざきなつはるか」を種子親とし、果実硬度が高い四季成り性の育成系統 06sAB-4e(「なつあかり」×盛岡 30 号)を花粉親とした交配を 2011 年に行い、選抜を重ねて「夏のしずく」を育成しました。
2. 寒冷地や高冷地における夏秋どり栽培に適する四季成り性の品種で、端境期である夏秋期に収穫できます。
3. 葉は大きく立ち上がって大株となります(写真 1)。ランナー発生は多く、増殖は容易です。
4. 既存の四季成り性品種である「なつあかり」や「サマーベリー」より収量が多く、夏期冷涼な立地ではこれらの品種の 1.4～2.4 倍となる 3t/10a 以上の商品果収量が見込めます。
5. 果実は円錐形で、果皮色は赤、果肉色は淡赤です(写真 2)。輸送性や日持ち性に関わる果実硬度は「なつあかり」や「サマーベリー」より高く、また、糖度、酸度ともに既存品種並みに高く、夏秋期におけるケーキ等の業務需要に適します。



写真 1. 「夏のしずく」の植物体



写真 2. 「夏のしずく」の果実

☆ 活用面での留意点

1. 萎黄病に対しては特に強くはないため、予防的な防除に努めることが重要です。
2. 利用許諾契約を締結した組織が種苗生産を行い、苗販売は 2021 年 9 月以降の予定です。
3. 詳しいことは、農研機構 HP (<https://prd.form.naro.go.jp/form/pub/naro01/research>) でお問い合わせ下さい。